



キ  
ン  
ク  
文  
庫

地  
下  
の  
調  
教  
部  
屋

地下の調教部屋

キンク文庫

文庫本（40字×17行）

219ページ

第1章 智子とエマ

服部幸介は妻のあや子とシドニー名物スカイウオークをしにシドニータワーに来ている。シドニーの街並みを一度くらい高い所から眺めてみようと思っただ。

「せっかくこつちに来てんだからいいだろう？ たまには」

「まあそうね、たぶん」

あまり乗り気ではなさそうな感じのあや子。

「はあく」

ため息までついた。

「幸平のこと、心配してんのか？」

「ええまあ、それもだけど」

「心配すんなくて。いまだきネットとかで話せたりするじゃないか」

「んーと、本当はそんなんじゃないんだけど……」

「ああ長期の出張のことか。仕方ないだろう？ 仕事なんだから」

「まあ、それだけならいいんだけどね」

「何だお前、疑ってんのか？」

「はくもう」

最近、やたら機嫌の悪いあや子だった。

しばらく歩いて、ふと前方を見渡した幸介、そこに白人らしき女性が立っていた。

しかし明らかに普通ではない——どういう訳か全裸なのだ。

ポールギャグとアイマスクを施され、何かで拘束されているのか両腕は背後に無理やり隠されている感じ。大事な部分はパイパンつまり毛は完全に剃られている。髪の毛は白とうす金色の混じったブロンドをしていて胸元あたりまで伸びており、足は裸足である。

高さが300メートル近くあるシドニータワーという日常から少しかけ離れた、そしてゴンゴンという音が聞こえてきそうな冷たく硬い鉄骨の上だからかどうか、彼女の色白くオーストラリア人の女性にしてはかなりほっそりとした身体は、周りの風景にまったく溶け込んでいない。いや冷たくて太い鉄骨に対比されるように、陳列された美麗な奴隷がひっそりと控えめにたたずんでいる感じすらあった。

そのへんの一般女性にしてはスタイルがいいなあと思ったが、アダルトビデオとかに出演するような女性であればそのような「本物の」ひっそり感は出ないはず。ギャグとアイマスクで隠れてはいるが、顔もかなりの美形に見える。

幸介はその白人女性に何か本当に怯えているような感覚を覚えた。綺麗な感じの白人女性、突然こんな場所に強引に連れて来られてきた、そんな感じがした。

そしてどういふ訳か彼女は命綱をしていなかった。目隠しさらに両腕を背後で何かで口ツクされ、そもそもこんな場所で全裸というあり得ないシチュエーションなのだ。

女性の股間の割れ目をじっと見入ってしまった幸介は、その背後に何やら白人女性の連れらしき影を見かけた。

白人女性の手枷から伸びているチェーンを握り、彼女の後ろに立っているその女の顔に見覚えがあった——その顔を見て幸介は背筋に悪寒が走った。

その女、つまり智子はシドニーでの幸介のミストレスだった。

智子は、白人女性の背後から幸介の視線に合わせると、やさしくそしていやらしい笑みを浮かべた。

「ちよっ……」

悲鳴すら出ないといった表情のあや子は、シヨックのせいかその場で硬直していた。

「あっ……あな……た」

あや子は幸介に何か助けを求めているようだったが、正直なところ幸介は智子と目を合わせないようにするのに必死で、あや子のことなど気にも留めていなかった。

自分はオーストラリアでは奴隷として智子に従っている。もし智子がいつもの奴隷に対する口調で自分のことを呼んだら、それはマズイことになる。

幸介がそんな心配していると、命令でもあったのかその白人女性がシドニーの街並みに

向かって股を大きく広げ、和式トイレに座るような恰好をしようとしていたのだ。

ただ目隠しをされているせいかしやがみこむ動作も上手くできないようだ。

智子は手に持っていたチェーンを上側に張るように持ち上げた。そうすることで白人女性の和式トイレの恰好が安定するようにしたようだ。智子はペット犬の小便を待つ旦那さまのようだった。

白人女性の両手首は手枷が施されており、彼女の背中付近で留められている。和式便所で用を足すような恰好をすると、どうしても尻を突きださなくてはバランスが保てない。

「あぐうあ……（うくん……）」

視界はないが、そこがどういふ場所なのかをある程度察していたその白人女性は、いつもこんなことをしているとは思えないような、本当に拉致か何かされてここに連れられてきたような感じに見える。

「さあ」

智子が手にしていたチェーンをひと振りした。同時に白人女性の首にはまっていた首輪がさらに釣り上げられた。

白人女性は慌てて、ひんやりと冷たい鉄骨上の床の足場を、足の裏で確認するようにした。何も見えないが、恥毛の剃られた恥丘から陰唇周りに、タワーの下から吹き上げてくる風が当たっている。

しばらくして、

ジヨロ……。

初めは女の太ももを伝っていたが、次第に勢いのある線となって女の前方に尿が放出された。

ジジャ……ガガガボボ……ポタポタ……。

——がしかし、鉄骨の一部に尿が当たって、そのまま下方に垂れ始めた。

パシッ！

智子の鞭が飛んだ。

タワ―の上とはいえ、かなりその音が響く。

「あぐあ……（いたいっ……）」

白人女性の顔が歪んだ。

「ちゃんと当たらないようにしなっ、エマ」

「ぐばあ……あはりまひた……（はっ……はい、わかりました……）」

猿轡を噛まされた口で、エマと呼ばれるその女性は、必死に何か言いたそうな感じだった。どうやら智子の日本語が理解できるらしい。多分ハーフとかなのかもしれない。日本人である智子とこんな変な関係なのだから、生まれ持った血が日本と何か関係があるのかもしれない。

エマは、足場をほんの少し前方に上げ、尿道の向きがもう少し上になるようにした。

「あがあ〜（ふう〜）」

それまで一旦停めていた放尿を再開した。

ジョロ……ジャヤー……。

彼女の後ろから見ていた幸介には、白く丸い尻の真ん中にあるややピンク色をした肛門が脱肛気味に緩んだ気がした。

今度の彼女の黄色い尿は、タワーの下をしばらく放物線を描くようにそのうち直線状に落下した。エマの身体からやや安堵の様子が見て取れた。同時に猿轡の下からは唾液がポタポタと落ちていた。

シドニーの観光名所の一つであるシドニータワーのてっぺんで全裸の放尿ショーとは……手の込んだ変態遊びをするな、と幸介は感心していた。そんな呑気なことを考えながらその様子を眺めていると、

「この子の汚くなったところを綺麗にしてもらうからな、サブのお前には」  
なんと智子が幸介に向かってそう叫んだ。

——くそっ。

確かに飲尿は好きだが、妻の前では言って欲しくなかった。

聞こえないフリをしていた幸介だったが、

智子はさらに、

「さもないと……」

すると放尿を終えたばかりのエマの首輪からチェーンを取り外そうとした。

(まさかこのエマという女をこの高さから落とそうとするんじゃないだろうな……)

こういう時の智子は何をするか判らない、幸介にはこの女の性格は痛いほど判っていた。「やれ」を言われたことをやらないとそれをヤルまで絶対に引かない性格。つまり自分の命令に異常に固執する女なのだ。

「わっわかった——すつするから……」

即座に智子にそう言う幸介。

「はあく？」

智子は(何だその口のきき方は?) というような顔をした。

(くっくっそう……妻のあや子の目の前でこんな醜態曝すのは初めてだが……しようがない)

「わっわかりました……智子さま」

自分の後ろで呆れてるであろう妻のあや子の表情が感じられたが、あえて後ろを気にしないでおこうと思った。

「じゃほらっ、やれよ早くっ」

智子はそう言うと、持っていたチェーンを持ち上げた。エマの首が釣り上げられると、その尻の下にちょうど幸介の頭が入るくらいのスペースが出来た。

ただエマの尻が後ろに突き出され、両手首が手枷されているので、その態勢のまま長くは保てないことは見て判った。

案の定、エマの太ももと、突き出された白い臀部はフラフラと前後していた。

「ほら早くしないとこの子、落ちちゃうわよ」

智子はワザと手にしていたチェーンの張りを緩めるようにした。

吊り下げられていたエマの頭部は一瞬落ちそうになり、女は前のめりになりそうだったが、両つま先でなんとか踏ん張った。

「くっそう」

いつかこういうことになるとは思っていたが、まさかこんな場所で、おまけに妻の前ですることになるとは思ってた。なかった。

足場は悪かったが、エマの臀部の後方にちょうど平坦なスペースがあったので、幸介はそこに仰向け気味に寝そべった。それでもゴツゴツとした感触と下からの吹く風が、自分が高い場所にいるということを認識させた。

(しかし……何ともいい景色だ)

和式トイレの穴の下から覗くと、こんな感じに見えるんだろうなという感じの景色だっ

た。

綺麗に剃られたエマの恥丘の下には、少しだけ覗いているクリトリスと、その周りに日本人のそれよりもピンクがかった感じの色の小陰唇がある。さつきまで放尿をしていたせいで、その辺りからポタツポタツと幸介の顔に黄色いしずくが落ちてくる。

外でこんなことをするのが初めてだからかどうか、エマの恥毛を剃った性器を外で見ると、もう学生くらいのマスコんじゃないかと思うくらい幼い感じを受ける。

「うー（いや……）」

エマは足もとをぐらぐらさせ、自身の尻をくいくいと震わせていた。

日本人の知らない男に見られて恥ずかしいということもあるのだろうし、中途半端な中腰の態勢のままでは、そろそろ肉体的に耐えられなくなっているのかもしれない。

智子はじっとしたまま、相変わらずチェーンは緩めたままだ。

「ヴー（うう……）」

エマはもう耐えられないというような声をあげると、ブルブルと両方の太ももを痙攣させた。さすがに目隠しされ、両腕を後ろで縛られ、こんな中腰座りでは数分もたないことは分かっていた。さらに口元から唾液がぼたぼたと絶え間なく落ちていく。

その後、ガクガクツと女の尻が上下したかと思うと、幸介の目の前の小陰唇に挟まれて見えていたクリトリスが、幼く見える恥丘もろとも、顔面に乗っかってきたという感覚だ

った。

「——んぐっ」

突然のことにびっくりした幸介だったが、放尿をし終えたハーフのパイパンまんこだ、思わず舌で味わいたくなってしまった。

鼻の頭にちようどクリトリスが当たっており、その下の尿道付近からの尿臭さが、何ともいえない味がした。

同時に幸介の舌の先端を、両小陰唇の隙間に忍ばせると、その尿臭さとはちよつと違うとろみのある味だった。

ピチャ、ピチャ……。

「んぐ……ぐ（あああ……）」

初めはエマも、幸介の顔に自身の性器を押しつけているということが恥ずかしかったのか、なるべく全体重が顔に乗らないように我慢しているというか、何となく躊躇しているようだった。

エマは自身のクリトリスが幸介の鼻に当たって気持ちよくなり、さらに幸介の舌が小陰唇から膣の入り口付近を舐め回し感じてきたのか、こんどは幸介の顔に自身の陰部を押し付けるように体重を乗せてきた。

さつきまでの中腰の態勢から、やっと安心できるポジションになったという安堵感もあ

ったのかもしれない。

そして幸介の顔にエマの性器もろとも乗っかってきたというか、鼻の頭と舌先がさらに小陰唇から膣の中にズリ入ったという感じになった。さっきまで少し臭っていた尿は、徐々が増えてきた女の愛液と混ざりあい、トロみのある芳醇な香りのチーズ臭さが、幸介をさらに興奮させた。

「ヴーヴー」

その圧迫感に酔いしれた幸介は、我を忘れて喘いだ。

エマも、クリトリスの当たる感覚と、下からの舌の挿入、そして声の振動に気持ち良くなり、自分で腰をくりくりと回しながら、イキたいような感覚に襲われているようだ。

「ウーウー」と喘ぎながら、必死に腰と尻を前後に振っていた。

エマは口元をなるべく下に向けられないようにしていた。猿轡ギャグのせいで絶え間なく滴り落ちそうな口の中からの唾液を、出来るだけ留めておきたいのだろう。

幸介自身もだいぶその気になっていた。そして近くにいるはずの妻のあや子と女王ミストレスの智子がいることなど忘れて楽しんでしまおうと思っていた。

しばらく精一杯に伸ばした舌先で、エマの膣入口付近を上下させていた幸介だったが、

同時に頭も上下させなくてはならず、さすがに疲れてきた。——と同時に、エマの幼くそして卑猥な菊の門を、どうしても嗅ぎたくなかった。

「お尻の穴、こっちに向けてよ」

幸介はエマにそう言った。それくらいのことはいくら智子でも許してくれるだろう。

幸介の舌の運動に合せるように腰を振り、どうも悦に入ってしまったエマは、

「ヴあい……（はい……）」

奴隷のような口のきき方のまま、一旦その腰の運動を止めた。

よろよろと静かに腰を上げると、今度は自分の尻がタワーの外側に向くように立ち向きを変えた。エマには見えてないのほとんど足でさぐって位置を確認しているようだった。

しばらくして幸介の言うとおりに、今度は尻穴が幸介の目の前に来るようにほぼ座り込んだ態勢になった。この角度だと幸介の視界には、エマの肛門しか見えないが、やはり舌だけはその奥にある膣内部に滑り込ませるように尖らせた。

エマもだいぶ興奮しているのか、初めのアンモニア臭さはほとんど無くなっていて、舌先にとろけるような愛液の甘い感覚だけが残った。

さらに今回は、鼻の頭にさつきとは異なる臭さというか、なんとも言えない臭さがあった。すぐ上の膣内部から分泌してきた愛液が、肛門の入り口付近に停滞していて、それが肛門内部からの分泌している液なのか、そもそも肛門の匂いがそうさせるのか、呼吸をす

るたびに「ツーン」という異臭が漂うのだ。

そしてそれが幸介が興奮したときに最も欲しい匂い、つまり大好物の液体だということ  
を自身が自覚していた。

「たまんねえ」

幸介はつい、それまで膣の入り口付近に挿入していた舌を引き抜くと、少し上にあつた  
目の前のアナルに挿入した。舌先を思いつきり尖らせて、肛門まわりを愛撫することもな  
しに突然そうした。それくらい良さそうな匂いだった。

エマも自分の尻の穴を誰かも判らない男に見られ、さらに舌を挿入されたことに興奮し  
たのか、幸介の舌先を押し出すように、尻穴を収縮させた。

ただその時の「ヌメツ」とした感覚が、さらに女の尻穴の性感帯を呼び起こした。

「があっ……(あっ……)」

エマは思わず喘いだ。

同時に幸介の顔面にある萎んだ穴の隙間から、幸介の唾液と女の膣からの愛液と腸内か  
らの液が混ざりあつたような液が絞り出され、それが幸介の口元に滴り落ちた。幸介はそ  
れをペロリとヒト舐めして味わうと、

「うくん、いい味」

目前で依然として収縮、拡張を繰り返している淫穴を眺めてそう言った。そのまま何時

間でもそうしていたい気がした。

「がう……（ぐう……）」

女は臀部をくねらせると、今度は自分で尻穴を拡張して、ワザと幸介にその内部を見せるようにし、さらにソコを舐めてくれと言わんばかりに、幸介の舌先の位置に穴がくるように乗つけてきた。

「スケベな女だ……いいねえ」

幸介は女の要望に応えるように、拡がった穴の内部に舌先を滑らせ、今度は中でベロンベロンと舌先をかき混ぜるようになった。

穴の内部は、肛門周りとはまた違った味がする。

やはり多少の苦さは感じられるか、その辺のある程度の苦さは幸介の許容範囲だった。逆にそれが無いと、アブノーマル感が出ないので興奮しないということもある。

「はうっ、はうっ」

幸介は、舐めると同時に声も出した。けっこう呼吸が出来ないということもあるし、自身が興奮しているということもある。さらに声の振動が女を興奮させてるに違いないとも思っていたからだ。

舌が疲れて痙攣しそうになったので、幸介は舌を肛門から抜いた。

女は「ブルツ」と、その白い尻を震わせたかと思うと、まだ何か足りないというような

感じで、顔を横に向かせた。

「えっ、もう終わり？」そんなことを言いたそうな感じだった。

さすがに舌が疲れていた幸介は、とりあえず両手で女の臀部を鷲掴みにした。ぐいぐいと力任せに握ったりして、女の尻をもて遊んだ。

肛門の周りは自分の唾液と女の愛液が残っていた。恥毛と同様に、尻穴の周りの毛も剃られており、尻の割れ目の溝には、うつすらと汗が滲んでいるようだった。

親指を「ぐいっ」と肛門の両脇に差し込むように入れた。さらに外側に力いっぱい拵げると、穴の中から直腸が少しはみ出してきた。

普段この穴はセックスには使っていないんじゃないかと思わせた。それくらい綺麗なピンク色をしていて、さらに傷ひとつない穴まわりをしているのだ。

幸介は思わずその穴に右手の人差し指を挿入した。

「があう……（うんぐっ……）」

突然のことに女は即座に反応した。やはり舌と指とでは感覚的に異なるらしい。

それでもさっきまで幸介の舌でさんざん濡れさせた穴だったので、指先は意外とすんなり入った。幸介の指全体に、女の直腸の生温かくにちゃにちゃした感覚がまとわりついた。指の関節を曲げてぐりぐりとかき混ぜ、腸壁のヌメヌメとした感覚を指先で味わう。

女の腰が捻じ曲げられ、臀部が大きく揺れた。

「がああん……（あゝん……）」

感じているのか？ 幸介はさらにぐりぐりと、今度は思いつき指先を円を描くように回した。

「ぐがああ（ぐううう）」

女の尻が大きく幸介の頭の方に滑るように突き出された。やはり気持ちいいようだ。

（なら、もう一本入れてやろう）

ズボズボと入っている人差し指の横から、中指を滑り込ませるようにして肛門に入れた。すでに一本入っていた穴なので何の抵抗もなくすんなり入った。

ニチャニチャ……。

二本の指を前後する度にイヤらしい音がした。

指を抜く度に快感が押し寄せるのか、女の尻穴の収縮具合が指の感覚に纏わりつくようだった。ギュツと締まる感覚と、指を穴から強引に抜き取る感覚が、交互に作用していた。

同時に、尻穴と二本の指の皮膚の間から、腸液のような白濁液が漏れ出してきた。

女のマンコからの愛液の量も多くなってきた。おそらくそっちの液が肛門の中に一旦入って出てきてしまったのかもしれない。

幸介はエマが、実は尻穴でも感じられる女なんだと思い、二本の指をさらに早く、ピストンのような動きをしながら、さらに途中で時折くねりを入れるような動きも入れた。

女の腸の内部を、大きくかき混ぜるように荒々しく前後したのだ。

「ぐがああ……ぐぐぐ……（あああ……ヴヴヴ……）」

女はやはり悶えてるようだ。

「このスケベ女が」

しばらく二本の指でピストンをしていた幸介だったが、少し疲れたので、両方の指を女の尻穴から引き抜いた。指には少し酸味のある白濁状の液体が付着している。

クンクンとその匂いを確認してしまった幸介だったが、何か医療現場を思い起こさせるような匂いと、さっきまで直腸に入ってたんだと思わせる糞の匂いが同時にした。

それが汚いと分かっていたが、見た目には愛液と変わりなかったせいも、幸介は思わずその液のたっぷりついた自身の指を舐めた。

「これ使いなっ」

突然、横から智子の声がした。黙って幸介とエマの行為を、その横で見ているのだろうか。

幸介の顔面にそれが落とされた——白い太めのデイルドだった。

「それ使えって言うてるだろう」

智子はそのデイルドを口に啞えるように幸介に即した。

普段は、ミストレス 智子 に対して顔面騎乗をしてもらう際に啞え、ミストレス 智子 が快感を得るようになるものではあるが、まさかコレをココで、しかもこのエマの狭い尻穴に使えというのか？

「——はい」

もう妻のあや子のことは幸介の頭の中には無かった。智子という女王と、目の前で自分の顔面に尻を向けているエマのことで正直、頭がいつぱいだ。

もうここまで来たら、なるようにしかならないだろう、そう思っただけでやってるのだから、妻のことを心配するとかいうか、妻の方を向くことなんてしないで思いつきやっつけてしまおう、これはもう最初から決めていたことだ。

デイルドを仰向けに寝たままに啞えた幸介は、挿入を今か今かと待ってるように見える目の前の尻穴に目を向けた。

内部の直腸の一部が、肛門の外側に赤く腫れた感じで這い出しているのがわかる。そんなに強くピストンをした訳ではないが、それでも二本の指でしかもこのエマは、肛虐の経験がほとんど無いように見受けられる。

(果たしてそんな女性にこんな大きなデイルドを挿入してもいいのか?)

幸介はそんな心配をする余裕さえあったが、  
パシッ!

「痛っ！」

直ぐに智子のムチが飛んできた。

「やれっ！」

そんなことを考えられるような立場ではないことは分かっていた。

幸介は、白いデイルドの先っぽを、まずエマのマンコ付近に付いている愛液と思われる液に浸すようにした。そしてそれから尻穴の方にデイルドの先端を向ける。

（まあ少しでも潤滑液がデイルドの先端に付いていた方が、彼女にとっては痛くないだろう……）

本当はこの目の前の可愛らしい処女と思われる菊穴を、自分自身のペニスで犯したいのだが、今回はそんな贅沢は言ってもらえない。

ズズズズ……グツ。

デイルドを下から顔面で押しつけることによって挿入しようとしたが、なかなか入って行かなかった。

（今まで挿入の経験があまりない女性に、こんな物を突然入れようなんて……）

パシッ！

「ガグッ（あうっ）」

今度はエマに、ミストレス智子のムチが飛んだ。

「お前は、腰落とせよっ」

「ガっ……ガイっ（はっ……はい）」

エマは言われた通りにした。

それまで中腰で踏ん張っていた下半身の力を抜くと、幸介の顔面の上に自身の全体重が乗るように腰かけた。

——がしかし、

「がぐあああああああ！（ぎやあああああ！）」

エマの尻穴に激痛が走った。

当たり前だ、さっきまで二本の指が入っていたとはいえ、今度は本物の男の逸物ほどの大きさのデイルドなのだ。その「痛さ」を知らない彼女だから簡単に自身の腰を落とすことが出来たのだろうが、そんな大胆なことはもう二度としないだろう。

「いっがあああ（いっ痛く……）」

そんな悲鳴にも似た声が聞こえたが、幸介にはどうすることもできない。

パシッ！

今度は幸介にムチが飛んできた。今度は何だ？　と思っただが、

「ほら、女を気持ちよくさせてやれよ」

なるほど、自分が啞えているデイルドを上下させろというのだろう。

(女に腰を上下させる余裕などないということか……)

幸介は智子の言うとおりに、頭を上下させデイルドが女の直腸内で上下するようにした。

「ああううう……ひた……い(ひいひいひい……いた……い)」

エマの悲鳴がした。

やはり最初にこのサイズは無理というものだ。

案の定、白いデイルドの側面に赤い色の液体が付着しているのが分かる。肛門の狭い部分で粘膜が切れたのだろう。

腸液と女の血液が混ざり合った薄赤い透明な液体が、デイルドを覆うように広がっていた——その色は段々と濃くなっていく。

パシッ!

「ほらっ、お前もそろそろヤレッ」

さらにエマに鞭を振るう智子。裸であれだけ重い鞭を何度も受けたら、完全にミミズ腫れになってるはずだが、ここからはそれも確認することができない。

彼女自身が痛みでその具合を感じているだけだろう。ひよっとしたらそれも徐々に快感になってきているのかもしれないが……。

エマはゆっくりと腰を前後させた。ちよつと前よりもだいぶスムーズに動かしてはいるが、それでもまだ、恐る恐るだ。

「がああ……ごあゝごあゝ（あああ……すすす）」

エマの呼吸がだんだん大きくなっていくのが分かった。

少しでもピストンが安定するように、幸介は下から両手でエマの臀部を支えるように軽く鷲掴みにしていた。最初の頃よりもエマの発汗具合が激しくなっているのがわかる。

「があがあがあ……くあゝ……ひた……い（はあはあはあ……くうゝ……いた……い）」

加えているデイルドが、段々と真つ赤に変色していることから、肛門の粘膜をどれくらい切っているのかも想像がついたが、それ以上に、彼女の初めての尻の快感が上回っているのかもしれない。

幸介がデイルドを上下しなくとも、エマ自身で腰を上下させて動かしているようだった。ちよつどデイルドが抜かれる方向つまり尻を持ち上げた時に、尻穴がギュツと締まること、そのデイルドを啜えている口の感覚からもわかる。

「があがあがあ……があがあがあ……（はあはあはあ……はあはあはあ……）」

女の身体から汗が幸介の顔の上に落ちてきていた。

腸内からキレて滲んできている血液と、マンコから垂れてきている愛液とが混ざりあった液体が、デイルドを伝って幸介の口の中に入ってきた。

思わず幸介は、半勃起している自分の逸物を、片手で擦ってしまった。

(いつもヤラれている智子の臭くて黒ずんだアナル穴に比べたら、こんな綺麗なアナルを  
拝みながらイカなくてどうするんだ?)

「ふふっ」

そんな笑いが隣からしたと思うと、

「じゃあ、そろそろいいわねっ」

そう言うとなんと智子は、エマの首輪に付いていたチェーンをぐいっと持ち上げた。

エマは、智子の突然のその行動に驚いたが、チェーンを引っ張る力が強くて、多少は痛  
かったが、それなりに気持ちよくピストン運動をしていたデイルドから、自身のアナルが  
抜き取られたのだ。

(どうしたんだらう? せっかく言われた通りにしていたのに……)

おそらくエマは、そんな気持ちだったのだらう。少し茫然とした感じで、その場でヨロ  
ヨロとしていた。肛門がヒリヒリして痛いせいもあったのだらう、生まれたばかりの子鹿  
のように、両足を痙攣させながら、その場で虚ろな目をしていた。

正直、幸介もまったく同じ気持ちだった。さつきから自分で逸物をシコシコして、上の  
エマの血生臭いアナルからの血液と腸液を啜りながら、自分もイこうとしていたのだ。

そこには黒いペニスのついたペニバンドを装着し、ガーターベルトをした智子の姿があ

った。

「さあ——」

智子は、それまでエマが座ってピストン運動をしてい幸介の顔面の上に立った。

さらに手にしていたチェーンをなるべく前方の遠くに持っていき、エマの後頭部が、幸介の下腹部あたりにくるようにして、幸介の上にエマを仰向けに寝かせた。そして、エマの両足は、智子の身体を挟み込むように開脚させた。

智子は、幸介の顔面の上にそんきよするとか、正座するような感じに座った。仰向けになった幸介の顔面の上に、智子が正座をするようにぺたっと座り、さらに智子と正常位でセックスをするような恰好に寝そべっているのがエマ、ということになる。

幸介が啞えている白いディルドはそのままなので、智子のヴァギナかアナルのどちらかに挿入させるつもりなんだろう。

「はっ……はふうう」

智子の尻穴は、エマの血で真っ赤に染まったディルドを、簡単に飲みこんだ。

さつきまでエマの尻穴から漏れていた血液と腸液は、智子の尻穴をファックするための潤滑油になった。そもそも智子の尻穴は十分に拡張されている。

「あゝ……いいわゝ」

智子は満足そうに感嘆を上げると、自分の腰をゆつくりとくねり始めた。

幸介の顔の上に正座するような感じで、完全に体重を幸介の顔面に掛けていることが幸介自身の感覚でわかっていた。両頬つぺたに智子の両尻の肉がそれぞれ圧迫するように当たっており、さらに全体重が口元にかかってくるので、上でいくら気持ちいいからといってグリグリされると、後頭部が下の硬い床と擦れて痛くなるときもある。

エマに比べると、智子のくねり方があまりにも激しいので、幸介にとつてデイルドを啜えている顎の力が徐々に無くなってきたことも分かっていた。

しかし啜えているデイルドを口から外すことは避けたい。それをやってしまうと智子の厳しい血の鞭の洗札が待っている。

「さあ、お前もだよ」

智子はそう言うと、目の前のエマの局部を、装着している自分の黒いペニバンに引きつけた。まるで中途半端に正座している男が、女のヴァギナに正常位で挿入するような恰好になった。

実際には、黒いペニバンをはめた女の智子ミストレスが、奴隷のエマのケツの穴を掘るという状態である。

「ひいっ……ぐあい……（いっ………たい……）」  
エマの顔が歪んだ。

無理はない。さっきまで別のデイルドが入っていたとはいえ、形も異なる、さらに大きめのペニバンが新たに入ったのだ。